2023年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」10月号

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

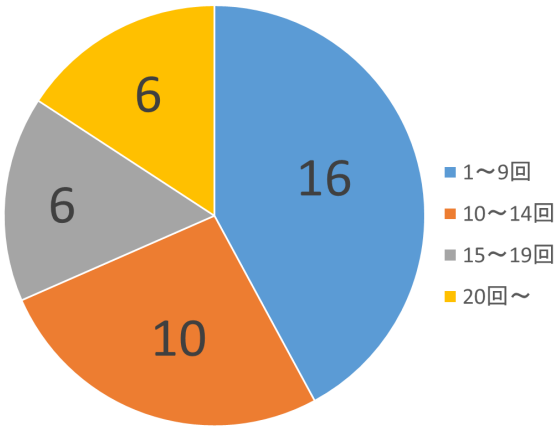
お知らせ

- ✧ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

  １０：１５～１０：５０　**地下フェロシップホールにて**

- ✧ **受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。**
- ✧ **後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。**
- ✧ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。
- ✧ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。
- ✧ ショートメッセージ動画は教会ホームページ上でも視聴できます。10：15 のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたい思われる方など、ぜひご活用ください。

学びの輪を広げましょう！



礼拝と学びがバプテスト教会の二本柱。
テキストをお読みくださっている皆様も、ぜひ毎週日曜10：15～の成人科にご出席ください！

今月の執筆者

（左：ショートメッセージ　右：聖書日課）

27課：田中由記子姉　宇佐美典子姉

28課：郷　健人兄　宇佐美典子姉

29課：岩崎秀子姉　渡部和子姉

30課：郷　秀男兄　小沢敬一兄

31課：栗山義亜兄　工藤征治兄

第２７課　「食いつくされたぶどう畑」

聖書箇所：イザヤ書３章１２～１５節
主題聖句：お前たちは私のぶどう畑を食い尽くし　貧しい者から奪って家を満たした。
（イザヤ３：１４）

今週からイザヤ書を学びます。
イザヤ書は66章からなり、詩編の次に長く、「エレミヤ書」「エゼキエル書」とともに三大預言書と呼ばれています。
預言者イザヤは、紀元前740年頃から紀元前690年頃にかけて、南ユダ王国で活躍した預言者で、イスラエルの神から離れ、他の神々を拝み、偶像礼拝をしていたイスラエルの人々に対して、力を捨て、唯一絶対の神に立ち返るよう、語ります。

今週（第27課）より4回にわたって、神のぶどう畑としてのイスラエルの話から学んでいきます。
イスラエルをぶどう畑と譬える言い方は、聖書に多く出てきます。
イスラエルの農業の中心がぶどうだったこともあり、ぶどう畑は特別に扱われていました。泥棒や獣の侵入を防ぐ防壁や見張り小屋が設置され、ぶどう以外の種を蒔くことは決してなく、手をかけてぶどうを育てました。
それは、神さまが、イスラエルの民を愛し、手をかけて、大切に育ててくださった様子と重なります。
しかし、そのぶどう畑が食いつくされてしまったのです。

3章の1節～3節で、神は、パンによる支えや水による支えを、また、支えとなり、頼みとなる者を取り去られると語られています。

想像してみてください。
生きていくのに欠かせない水や食糧がなくなったら、どうやって生きていけばよいのでしょうか？
私たちが住むこの社会に、当たり前のように存在する様々な職業の方々がいなくなったら、この世界はどうなるでしょう。あっという間に無秩序で、争いの絶えない、混乱極まりないものとなるでしょう。

しかし言え、主に従う人は幸い、と。
彼らは自分の行いの実を食べることができる。（10節）

私たちが必要だと思って、確保しよう、頼りにしようと思っている物や人は、本当に大切なものなのでしょうか？少なくとも、主よりも大切なものはないはずです。主は、必要なものは与えてくださるお方です。それなのに、いつの間にか、主よりも、物や人が大切になってしまってはいないでしょうか？　人に頼るのではなく、主により頼み、従うようにと、イザヤは語ります。ただ、主のみを信じ、主のみ前で罪を悔い改めることによって、主の憐れみを受け、救われるのです。

私の民よ、お前たちを導く者は、迷わせる者で、行くべき道を乱す（12節）

今までの歴史の中で、愚かな支配者のために、弱い者たちが犠牲になったことがどれだけあったでしょうか？大切に慈しみ育てたぶどう畑が荒らされていく、せっかくなった実が食いつくされていく様子を見て、主はどれほど悲しまれたことでしょう。

主は、国の長老や支配者らを裁くとおっしゃいます。主の大切なぶどう畑を食い尽くしたからです。貧しいものを虐げ、貧しいものから奪ったもので自分の欲を満たしたからです。
主は、貧しいもの、小さなもの、弱いものを顧み、憐れみ、祝福を与えてくださるお方なのです。

私たちは、私たちを迷わせる者に、盲目的に、あるいは、無自覚についていかないように、気を付けなければなりません。何を信じ、何を大切にし、何に従うか、正しく選び取ることができますようにと願います。
また、同時に、自分が、主の大切なぶどう畑を荒らすことがないようにということにも注意を払わなければなりません。自分の利益のために、自分さえよければという身勝手な思いで、ぶどう畑を荒らしたり、誰かがぶどう畑を荒らすのを見て見ぬふりをしたりすることのないように、主につながって、よい実を結ぶことができるよう、主を見上げて歩んでまいりましょう。

～分かち合い～
- 今も、主が大切に育てられたぶどう畑が、世界のあちこちで食い尽くされています。その様子を主はどのような思いで見ておられるでしょうか？
- 主のぶどう畑が大切に守られるように、私たちにできることは何でしょうか？

１０月１日（日）イザヤ書３章１２－１５節

12わたしの民は、幼子に追い使われ
女に支配されている。
わたしの民よ
お前たちを導く者は、迷わせる者で
行くべき道を乱す。
13主は争うために構え
民を裁くために立たれる。
14主は裁きに臨まれる
民の長老、支配者らに対して。
「お前たちはわたしのぶどう畑を食い尽くし
貧しい者から奪って家を満たした。
15何故、お前たちはわたしの民を打ち砕き
貧しい者の顔を臼でひきつぶしたのか」と
主なる万軍の神は言われる。

神はイスラエルの民をご自身のぶどう畑とし、こよなく愛し慈しみ、手をかけて育てました。それにも関わらず、人々は神に背き、御心に逆らい、その歩みや行いを悔い改めることをしませんでした。そのことによってついに神の審判が下されます。しかし神は希望へと繋がる道も用意しておられます。それは自分たちの誤りを正して、神との関係を回復することによって開かれます。

１０月２日（月）出エジプト記１章１２－２０節

12しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、 13イスラエルの人々を酷使し、 14粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活を脅かした。彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。
15エジプト王は二人のヘブライ人の助産婦に命じた。一人はシフラといい、もう一人はプアといった。 16「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」 17助産婦はいずれも神を畏れていたので、エジプト王が命じたとおりにはせず、男の子も生かしておいた。 18エジプト王は彼女たちを呼びつけて問いただした。「どうしてこのようなことをしたのだ。お前たちは男の子を生かしているではないか。」 19助産婦はファラオに答えた。「ヘブライ人の女はエジプト人の女性とは違います。彼女たちは丈夫で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」 20神はこの助産婦たちに恵みを与えられた。民は数を増し、甚だ強くなった。 21助産婦たちは神を畏れていたので、神は彼女たちにも子宝を恵まれた。

エジプト王はイスラエルの民が増加することに危機を感じ、過酷な労働によって出生率を減らそうとしますが、正反対の結果がでます。そこで、王は助産婦たちに男子が生まれたら殺すように命じます。彼女たちは王よりも神を畏れる人たちだったので、信仰によって王に勝利しました。彼女たちの神を畏れる信仰と勇敢さによって赤ちゃんの命が守られました。まことに信頼すべき方に従い、みわざのために用いられたのです。

１０月３日（火）ルカによる福音書２２章４９－５１節

49イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。 50そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。
51そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた。

弟子は主を守るために剣を抜きましたが、主は自分を捕らえようとやって来た大祭司の部下の傷を癒やします。「やめなさい、もうそれでよい」武力を問題解決の手段にすることを戒めておられます。イエスさまは剣に剣で返したりせず、裏切りに激しくののしったりせず、まっすぐな言葉で語られます。

１０月４日（水）申命記３２章7-１８節

7遠い昔の日々を思い起こし
代々の年を顧みよ。
あなたの父に問えば、告げてくれるだろう。
長老に尋ねれば、話してくれるだろう。
8いと高き神が国々に嗣業の土地を分け
人の子らを割りふられたとき
神の子らの数に従い
国々の境を設けられた。
9主に割り当てられたのはその民
ヤコブが主に定められた嗣業。
10主は荒れ野で彼を見いだし
獣のほえる不毛の地でこれを見つけ
これを囲い、いたわり
御自分のひとみのように守られた。
11鷲が巣を揺り動かし
雛の上を飛びかけり
羽を広げて捕らえ
翼に乗せて運ぶように
12ただ主のみ、その民を導き
外国の神は彼と共にいなかった。
13主はこれを丘陵の地に導き上り
野の作物で養い
岩から野蜜を
硬い岩から油を得させられた。
14彼らは、牛の凝乳、羊の乳
雄羊の脂身
バシャンの雄牛と雄山羊
極上の小麦を与えられ
深紅のぶどう酒、泡立つ酒を飲んだ。
15エシュルンはしかし、肥えると足でけった。
お前は肥え太ると、かたくなになり
造り主なる神を捨て、救いの岩を侮った。
16彼らは他の神々に心を寄せ
主にねたみを起こさせ
いとうべきことを行って、主を怒らせた。
17彼らは神ならぬ悪霊に犠牲をささげ
新しく現れ、先祖も知らなかった
無縁の神々に犠牲をささげた。
18お前は自分を産み出した岩を思わず
産みの苦しみをされた神を忘れた。

我が子を愛する親のように神はイスラエルを養い育ててきたのに、自分たちを造られた方を民が知らないことは悲劇です。またキリストによって救いの恵みに与ったのに、キリストを知らないことも悲劇です。私たちは日々の生活の中で、神を忘れ神に無関心で生きようとするならば、一見、豊かで平和に見える日々の中で、霊的には不健康になり、本当の幸せ、自由から遠ざかってしまうことを知らなくてはなりません。

１０月５日（木）詩編１２６編

1【都に上る歌。】
主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて
わたしたちは夢を見ている人のようになった。
2そのときには、わたしたちの口に笑いが
舌に喜びの歌が満ちるであろう。
そのときには、国々も言うであろう
「主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた」と。
3主よ、わたしたちのために
大きな業を成し遂げてください。
わたしたちは喜び祝うでしょう。
4主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように
わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。
5涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。
6種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は
束ねた穂を背負い
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

バビロン捕囚からの帰還を記念し喜びを表しています。同時に、まだ実現されていない大きなみわざの実現を願い求めています。希望を持って神への信仰にしっかりと留まり、ネゲブの川に水が満ちるように、福音の種を蒔き大きな収穫がもたらされるように祈ります。

１０月６日（金）ルカによる福音書１５章１１－３２節

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。 12弟の方が父親に、『お父さん、
わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二
人に分けてやった。 13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立
ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。 14何もかも使い果たした
とき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。 15それで、その地方
に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。 16
彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいな
かった。 17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、
有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。 18ここをたち、父のとこ
ろに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しま
した。 19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』 20そ
して、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息
子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。 21息子は言った。『お父さ
ん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資
格はありません。』 22しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来
て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。 23それから、肥えた
子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。 24この息子は、死んでいたのに生き返り、い
なくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。25ところで、兄の方は畑に
いたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。 26そこで、僕の一人を
呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。 27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。
無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』 28兄は怒って家に
入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。 29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、
わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それな
のに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。
30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来る
と、肥えた子牛を屠っておやりになる。』 31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつも
わたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。 32だが、お前のあの弟は死んでい
たのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当た
り前ではないか。』」

どんなみじめな姿であってもありのままを告白し、父に委ねるとき、救われ生きるべき命が与えられます。父は息子の帰りを待ちわび、ご自分のもとに帰ってくることを喜んでおられます。その父と共にあることが何よりも大きな喜びであることに気づくよう教えています。

１０月７日（土）サムエル記上１章８－２０節

8夫エルカナはハンナに言った。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。なぜふさぎ
込んでいるのか。このわたしは、あなたにとって十人の息子にもまさるではないか。」
9さて、シロでのいけにえの食事が終わり、ハンナは立ち上がった。祭司エリは主の神殿の柱
に近い席に着いていた。 10ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。 11そして、誓いを
立てて言った。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘
れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の
頭には決してかみそりを当てません。」
12ハンナが主の御前であまりにも長く祈っているので、エリは彼女の口もとを注意して見た。
13ハンナは心のうちで祈っていて、唇は動いていたが声は聞こえなかった。エリは彼女が酒に

酔っているのだと思い、 14彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましてきなさい。」 15ハンナは答えた。「いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。ぶどう酒も強い酒も飲んではおりません。ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。 16はしためを堕落した女だと誤解なさらないでください。今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。」そこでエリは、 17「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」と答えた。 18ハンナは、「はしためが御厚意を得ますように」と言ってそこを離れた。それから食事をしたが、彼女の表情はもはや前のようではなかった。 19一家は朝早く起きて主の御前で礼拝し、ラマにある自分たちの家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知った。主は彼女を御心に留められ、 20ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル（その名は神）と名付けた。

子どもがいない母親が絶望の淵で祈っています。祈りは聞かれハンナは子どもを授かります。エルカナの家に新しい命が与えられ、イスラエルの民全体に王家の誕生という未来が開かれます。熱心に祈り神を求めるとき、神は祈りを心に留められ、私たちを圧倒するほどの祝福を与えてくださいます。

第２８課　「神の悲しみ」

聖書箇所：イザヤ書５章１～６節
主題聖句：しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。（イザヤ５：２）

全１２回にわたるイザヤ書の学び、第2回です。前回の箇所である第3章も含め、イザヤ書の冒頭１～４章からは、猛烈な神の怒りと警告が感じられます。民の不義を責めると共に、エルサレムにとっての終末的なビジョンが具体的に語られ、ようやく４章では希望も示されますが、それは「生き残った者・残された者」だけが見る世界です。イザヤからこれらの言葉を聞いた民は、恐れて縮み上がったのではないでしょうか。

そうした流れを経て読まれる本日の箇所は、若干トーンが変わっているようにも見えます。「わたしは歌おう、わたしの愛する者のために　そのぶどう畑の愛の歌を。（５：１）」非常に詩的で、穏やかな言葉の連なりを予感させます。ここでの「わたし」はイザヤ、「わたしの愛する者」は神を指します。神の猛烈な怒りを預言しながら、神を「わたしの愛する者」と呼ぶイザヤ。どんな怒りのなかにあっても神がイザヤを、そして私たちを愛していることが示されています。

神は自らをぶどう畑の持ち主にたとえ、もともと「肥沃な丘」であったところを、さらに「よく耕して石を除いた」と語ります。ぶどうを植えるのに最高の環境が用意されたのです。さらに、植えたぶどうは「良いぶどう」でした。選び抜かれた種が植えられたのでしょう。その上で、鳥や泥棒から守るために「見張りの塔」まで建て、至れり尽くせりのぶどう畑が完成しました。まさに、神の愛です。神は期待のあまり、ぶどうを収穫した後の準備すらされています。「酒ぶね」とは収穫したぶどうを入れて、足で潰すなどしてぶどう酒を作るための道具です。そうするほどに、良いぶどうが出来るのが確定的な環境が作られ、また十分な手入れがされていたのです。

しかし、出来たのは「酸っぱいぶどう」でした。これは味が美味しくない、という状態ですらなく、腐って悪臭を放つ状態を意味します。神の失望は計り知れません。完全な準備をしたのに、それに見合わない結果が生じることの虚しさは、時代や環境を超えて誰にも共感ができることでしょう。「あなた達がやっているのは、そういうことだよ」と主は教えてくださっているのです。

神の警告は続きます。
「さあ、お前たちに告げよう/わたしがこのぶどう畑をどうするか。/囲いを取り払い、焼かれるにまかせ/石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ」（5：5）

神自らがぶどう畑を焼き尽くすのではなく、畑を守っていた囲いや石垣が取り除かれ、悪の手から守る物が無くなります。失って初めて、自分たちがどれだけ神の愛溢れる庇護のもとにいたのか、気付くことでしょう。

「わたしはこれを見捨てる。/枝は刈り込まれず/耕されることもなく/茨やおどろが生い茂るであろう。/雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。」（5：6）

１～２節だけを読むと、種を植えた後はのんびり待っていただけのようにも見える神が、実はこれだけ手入れをしてくださっていたことが6節で分かります。実際、私たちは人生の至る所で神の守り、導きを感じています。それを失った先の人生は、荒れ果てたぶどう畑どころではない、堕落したものになるでしょう。こうした言葉の数々を通して、神は人々に「気付け、立ち返れ」と促しておられるのです。

さて、ぶどう畑がたとえに用いられる点では、前回の3章と今回の５章は共通しています。3章では「ぶどう畑」全体に焦点をあてて、神の作られた世界が愚かな支配者たちに踏みにじられていること、すなわち社会の在り様への問題意識を投げかけていましたが、5章では「ぶどう」自体の不出来、つまり個々人の生き方が問題になっています。５章の前までを読んで、そうだこの“社会”は間違っているよな！俺たちで“世の中”を変えていこう！と思った人も、きっと5章で“あなた”が酸っぱいぶどうなのだと言われ、ドキっとしたことでしょう。現代においても、戦争など様々な社会の問題に心を痛め、祈りを合わせようとする私たちがいます。その思いは大切に保ちつつ、同時に、いや、まず先に自分自身が「良いぶどう」でいようと願い、祈り、努めることの大切さも、この箇所には示されているように思います。

実際の植物を考えれば、酸っぱいぶどうが自力で良いぶどうに変わることは不可能でしょう。同じように、私たちも自らの力で生まれ変わることはできません。しかし神は「まことのぶどうの木」、イエスさまをお与えくださいました。イエスさまが伝えてくださった福音を糧に、私たちは日々新たに造り変えていただけるのです。その希望が備えられていることを心に留めつつ、引き続きイザヤ書から学んでまいりましょう。

～分かち合い～

- 3章4節で神は「わたしがぶどう畑のためになすべきことで何か、しなかったことがまだあるというのか」と問いかけます。「ぶどう畑」という言葉を「あなた」に置き換えた時、どのようなことを思いますか。
- 日々、神を失望させてしまう私たちが「良いぶどう」であるために成すべきこととは、何でしょうか。

１０月８日（日）イザヤ書５章１－６節

1わたしは歌おう、わたしの愛する者のために
そのぶどう畑の愛の歌を。
わたしの愛する者は、肥沃な丘に
ぶどう畑を持っていた。
2よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り
良いぶどうが実るのを待った。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
3さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ
わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
4わたしがぶどう畑のためになすべきことで
何か、しなかったことがまだあるというのか。
わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに
なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。
5さあ、お前たちに告げよう
わたしがこのぶどう畑をどうするか。
囲いを取り払い、焼かれるにまかせ
石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
6わたしはこれを見捨てる。
枝は刈り込まれず
耕されることもなく
茨やおどろが生い茂るであろう。
雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。

「ぶどう畑」はイスラエルの民でありその畑を所有しておられるのが神です。これまでいかに苦労してイスラエルの民を育ててきたか、切々と訴えておられます。甘いぶどうを待ち望んだのに、なぜ酸いぶどうができたのかと怒り、同時に悲しんでおられます。しかし神は、私たちが主を信じる信仰によって甘いぶどうを豊かに実らせることを、諦めずに期待して待っておられます。

１０月９日（月）申命記２４章１４－２１節

14同胞であれ、あなたの国であなたの町に寄留している者であれ、貧しく乏しい雇い人を搾取
してはならない。 15賃金はその日のうちに、日没前に支払わねばならない。彼は貧しく、そ
の賃金を当てにしているからである。彼があなたを主に訴えて、罪を負うことがないようにし
なさい。
16父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない。人は、それぞれ自分の
罪のゆえに死に定められる。
17寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない。寡婦の着物を質に取ってはならない。 18あな
たはエジプトで奴隷であったが、あなたの神、主が救い出してくださったことを思い起こしな
さい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである。
19畑で穀物を刈り入れるとき、一束畑に忘れても、取りに戻ってはならない。それは寄留者、
孤児、寡婦のものとしなさい。こうしてあなたの手の業すべてについて、あなたの神、主はあ
なたを祝福される。 20オリーブの実を打ち落とすときは、後で枝をくまなく捜してはならな
い。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。 21ぶどうの取り入れをするときは、後で
摘み尽くしてはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。

かつてエジプトの奴隷だったイスラエルの民。神がイスラエルを救い出され、豊かに生きられるようにしてくださいました。このことを記憶しているならば、弱者を苦しめたり、助けを必要とする人を無視したりすることはしないはずです。畑を刈り尽くさないこと、困っている人に作物を残しておくことは、現代の私たちの生活に置き換えるとどんなことを指すのでしょうか。

１０月１０日（火）コリントの信徒への手紙二　１２章９－１０節

9すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。 10それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

自分の弱い部分を自覚し、神にすべてを委ねると、神さまは弱い私たちを強めてくださいます。一人では打ち負かされても、立ち上がれなくても、神さまと二人なら立ち向かえます。三つよりの糸は簡単には切れません。神さまと三つよりの関係になれますように。（コレヘト4：12）

１０月１１日（水）列王記下４章１－７節

1預言者の仲間の妻の一人がエリシャに助けを求めて叫んだ。「あなたの僕であるわたしの夫が死んでしまいました。ご存じのようにあなたの僕は主を畏れ敬う人でした。ところが債権者が来てわたしの子供二人を連れ去り、奴隷にしようとしています。」 2エリシャが、「何をしてあげられるだろうか。あなたの家に何があるのか言いなさい」と促すと、彼女は、「油の壺一つのほか、はしための家には何もありません」と答えた。 3彼は言った。「外に行って近所の人々皆から器を借りて来なさい。空の器をできるだけたくさん借りて来なさい。 4家に帰ったら、戸を閉めて子供たちと一緒に閉じこもり、その器のすべてに油を注ぎなさい。いっぱいになったものは脇に置くのです。」
5彼女はエリシャのもとから出て行くと、戸を閉めて子供たちと一緒に閉じこもり、子供たちが器を持って来ると、それに油を注いだ。 6器がどれもいっぱいになると、彼女は、「もっと器を持っておいで」と子供に言ったが、「器はもうない」と子供が答えた。油は止まった。 7彼女が神の人のもとに行ってそのことを知らせると、彼は言った。「その油を売りに行き、負債を払いなさい。あなたと子供たちはその残りで生活していくことができる。」

私の家には何もないと言って、恵みの賜物から目を逸らすのではなく、「油壺一つ」与えられている恵みに目を向ける信仰を持ちましょう。絶望的な危機でも喜びは回復できます。空の器を神のもとに持ち込むとき、あふれるほどの大きな恵みで満たしてくださいます。

１０月１２日（木）ルカによる福音書１８章１－８節

1イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。 2「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。 3ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。 4裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。 5しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」 6それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。 7まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。 8言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

「祈りは聞かれない」「これは神さまの御心に適わない」など、勝手に思い込んで祈ることを諦めていませんか。自分の尺度で神さまを理解しようとするのは大きな間違いです。イエスさまは気を落とさず熱心に祈ることを教えておられます。神さまは、昼も夜も叫び求めるほどの熱心な祈りをする人を、いつまでも放っておかれることはないのです。

１０月１３日（金）エレミヤ書９章１６－２３節

16万軍の主はこう言われる。
事態を見極め、泣き女を招いて、ここに来させよ。
巧みな泣き女を迎えにやり、ここに来させよ。
17急がせよ、我々のために嘆きの歌をうたわせよ。
我々の目は涙を流し
まぶたは水を滴らせる。
18嘆きの声がシオンから聞こえる。
いかに、我々は荒らし尽くされたことか。
甚だしく恥を受けたことか。
まことに、我々はこの地を捨て
自分の住まいを捨て去った。
19女たちよ、主の言葉を聞け。
耳を傾けて、主の口の言葉を受け入れよ。
あなたたちの仲間に、嘆きの歌を教え
互いに哀歌を学べ。
20死は窓に這い上がり
城郭の中に入り込む。
通りでは幼子を、広場では若者を滅ぼす。
21このように告げよ、と主は言われる。
人間のしかばねが野の面を
糞土のように覆っている。
刈り入れる者の後ろに落ちて
集める者もない束のように。
22主はこう言われる。
知恵ある者は、その知恵を誇るな。
力ある者は、その力を誇るな。
富ある者は、その富を誇るな。
23むしろ、誇る者は、この事を誇るがよい
目覚めてわたしを知ることを。
わたしこそ主。
この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事
その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる。

まことの神の言葉に聞き従わず、異教の神バアルを拝み、自分たちの欲に捕らわれ歩むイスラエルに神の審判が下ります。預言者エレミヤは、荒れ果てたイスラエルを嘆き神に立ち帰るよう訴えますが、人々はその言葉にも無関心でした。自分たちの知恵や力、富を誇りとし生きていても救いの道には入れません。私たちの心と魂と力をもって神を求め礼拝するとき、神は溢れる恵みを与えてくださり、救いの道へと導いてくださいます。

１０月１４日（土）サムエル記下１１章１－２６節

1年が改まり、王たちが出陣する時期になった。ダビデは、ヨアブとその指揮下においた自分の家臣、そしてイスラエルの全軍を送り出した。彼らはアンモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデ自身はエルサレムにとどまっていた。
2ある日の夕暮れに、ダビデは午睡から起きて、王宮の屋上を散歩していた。彼は屋上から、一人の女が水を浴びているのを目に留めた。女は大層美しかった。 3ダビデは人をやって女のことを尋ねさせた。それはエリアムの娘バト・シェバで、ヘト人ウリヤの妻だということであった。 4ダビデは使いの者をやって彼女を召し入れ、彼女が彼のもとに来ると、床を共にした。彼女は汚れから身を清めたところであった。女は家に帰ったが、 5子を宿したので、ダビデに使いを送り、「子を宿しました」と知らせた。
6ダビデはヨアブに、ヘト人ウリヤを送り返すように命令を出し、ヨアブはウリヤをダビデのもとに送った。 7ウリヤが来ると、ダビデはヨアブの安否、兵士の安否を問い、また戦況について尋ねた。 8それからダビデはウリヤに言った。「家に帰って足を洗うがよい。」

ウリヤが王宮を退出すると、王の贈り物が後に続いた。 9しかしウリヤは王宮の入り口で主君の家臣と共に眠り、家に帰らなかった。 10ウリヤが自分の家に帰らなかったと知らされたダビデは、ウリヤに尋ねた。「遠征から帰って来たのではないか。なぜ家に帰らないのか。」
11ウリヤはダビデに答えた。「神の箱も、イスラエルもユダも仮小屋に宿り、わたしの主人ヨアブも主君の家臣たちも野営していますのに、わたしだけが家に帰って飲み食いしたり、妻と床を共にしたりできるでしょうか。あなたは確かに生きておられます。わたしには、そのようなことはできません。」 12ダビデはウリヤに言った。「今日もここにとどまるがよい。明日、お前を送り出すとしよう。」ウリヤはその日と次の日、エルサレムにとどまった。 13ダビデはウリヤを招き、食事を共にして酔わせたが、夕暮れになるとウリヤは退出し、主君の家臣たちと共に眠り、家には帰らなかった。
14翌朝、ダビデはヨアブにあてて書状をしたため、ウリヤに託した。 15書状には、「ウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼を残して退却し、戦死させよ」と書かれていた。 16町の様子を見張っていたヨアブは、強力な戦士がいると判断した辺りにウリヤを配置した。 17町の者たちは出撃してヨアブの軍と戦い、ダビデの家臣と兵士から戦死者が出た。ヘト人ウリヤも死んだ。
18ヨアブはダビデにこの戦いの一部始終について報告を送り、 19使者に命じた。「戦いの一部始終を王に報告し終えたとき、 20もし王が怒って、『なぜそんなに町に接近して戦ったのか。城壁の上から射かけてくると分かっていたはずだ。 21昔、エルベシェトの子アビメレクを討ち取ったのは誰だったか。あの男がテベツで死んだのは、女が城壁の上から石臼を投げつけたからではないか。なぜそんなに城壁に接近したのだ』と言われたなら、『王の僕ヘト人ウリヤも死にました』と言うがよい。」
22使者は出発し、ダビデのもとに到着してヨアブの伝言をすべて伝えた。 23使者はダビデに言った。「敵は我々より優勢で、野戦を挑んで来ました。我々が城門の入り口まで押し返すと、 24射手が城壁の上から僕らに矢を射かけ、王の家臣からも死んだ者が出、王の僕ヘト人ウリヤも死にました。」 25ダビデは使者に言った。「ヨアブにこう伝えよ。『そのことを悪かったと見なす必要はない。剣があればだれかが餌食になる。奮戦して町を滅ぼせ。』そう言って彼を励ませ。」
26ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだと聞くと、夫のために嘆いた。

ダビデは部下ウリヤの妻バトシェバの美しさに心を奪われ、彼女を自分のものにした上、ウリヤを戦いの最前線に送り戦死させました。「ダビデのしたことはみこころに適わなかった」（27節）と聖書は語ります。神は預言者ナタンを通して、ダビデの罪を明らかにし、悔い改めへと導かれます。詩編51編にはこのときのダビデが心から悔い改める祈りが記されています。

第２９課　「ミシュパトとツェダカ」

聖書箇所：イザヤ書５章７～１０節
主題聖句：イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。
（レビ記１９：２）

先週のイザヤ書5章1節～6節では、「神の悲しみ」と題してぶどう畑の箇所から学びました。今週は、その続きとなる7節～10節です。どのような御言葉が語られているのかを読んでまいりたいと思います。
週題「ミシュパトとツェダカ」とはどういう意味なのでしょうか。
そして主題聖句は、レビ記19章2節の「イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。」とさせていただきました。

イザヤの神理解の特色は、神が「聖」なる存在であるということにあります。
「聖」とは、神は人間とは異なる次元に存在されるお方であることを表します。
神さまは、人間の世界と歴史を究極的に支配する存在でもあります。
人間の世界には、合理的に説明がつかない事、さまざまな矛盾や問題が後を絶ちません。
そして、人間は愚かで、かたくなで、自己中心的であり、常に混乱の世の中にある存在でると言わざるを得ません。
人間の罪により混沌としている世界に、神さまはさまざまな仕方で御言葉と赦しと救いを、今なお諦めずに行ってくださっています。

神は、イスラエルをお選びになり、預言者を立てられました。そして、ダビデとその子孫を王とされ、エルサレムに神の宮をお建てになり、神の存在と御業を示されました。
しかし、イスラエルの民は神の律法を守らず、エルサレムの祭儀は堕落し、王は神の意志に従わず政治を行いました。
神により召し出された預言者たちの召命は、堕落したエルサレムの政治的指導者・宗教的指導者に対して警告し、真実な内容からかけ離れてしまった祭儀を批判し、王と政治的指導者たちに対して適切な指針を与えることでした。イザヤはそのような状況の中で、神の支配の確信に立って、人間のおろかさを説きました。
イザヤ書は大預言書として、現代においてもその御言葉は大切な指針として私たちに届けられています。いつの時代にも動乱は避けられず、繰り返されています。

7節は、ぶどう畑の比喩の最後の節として、謎を含んだ譬えから、イスラエルをぶどう畑に譬え、エルサレムの都市貴族による災いが記されています。
流血と叫喚という言葉に表されているように、神との約束に従わず大きな罪を犯します。
この7節は、皆さまもお気づきかもしれませんが、新約でイエスさまが語られた、マタイ21章33節～45節、マルコ12章1節～12節、ルカ20章9節～19節の「ぶどう園と農夫のたとえ」に引用された箇所です。この聖書箇所におけるぶどう園の主人は神さまで、息子はイエスさまです。ぶどう畑はイスラエルであり、農夫とはエルサレムの都市貴族・権力者であり、僕とは旧約の預言者を指します。
新約においても三つの福音書で語られている譬えですが、歴史においても同じ事が繰り返されていることを、私たちは重く受け止めなければならないと思います。

イザヤは、甘いぶどうではなく酸っぱいぶどうであったと語ります。これは、神さまがよい実、つまり甘いぶどうを実らせることができるように、という願いと共に裁きの意味も含まれていると言われています。ふさわしい実を結ぶ民族にぶどう畑は与えられるという、異邦人にも期待を込めている言葉として受け取ることができると思われます。そして新約においては、イエスさまの言葉として記されています。

私たちも異邦人の一人です。神さまの願いは、世界中の異邦人である一人ひとりにイスラエルの人々と同じように期待されていることがわかります。わたしたちはよい実を結ぶことができているでしょうか？　いつでも、主が刈り取りに来られる時収穫できる実を持っているでしょうか？
イエスさまにより私たちは、ぶどうの木に繋がる者とさせていただいています。

果たして私たちは、神さまとの関係において公正（ミシュパト）と正義（ツェダカ）にふさわしい行動言動を行っているでしょうか？
教会の共同体の一員として、主が招いてくださっていることを日々忘れることなく、感謝の祈りをお捧げすることができる者でありたいと思います。
聖書の学びの時、分かち合いの時を通して、自分の信仰の歩みや聖書理解を確認し続けることが、いかに大切であるかを改めて思わされます。

8節から「災いだ」という六回の言葉により預言が述べられます。内容は、都市貴族の横暴な姿を描き、審判の時を告知しています。
第一の「災いだ」で、都市貴族の土地独占を批判しています。
第二の「災いだ」で、酒ばかり飲んでいる貴族の姿を描き、神の御業に目をとめようとしないことに対する罰が語られます。
第三の「災いだ」は、金銀権力によって災い及ぼし、咎を引き寄せていると語られます。
第四の「災いだ」は、アモス書5章7節「裁きを苦よもぎに変え、正しいことを地に投げ捨てる者よ。」と12節「お前たちの咎がどれほど多いか、その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り、門の前で貧しい者の訴えを退けている。」と同様の内容と言われています。
第五の「災いだ」は、出エジプト記23章8節「あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は、目のあいている者の目を見えなくし、正しい人の言い分をゆがめるからである。」と、申命記27章25節「賄賂を取って、人を打ち殺して罪のない人の血を流す者は呪われる。民は皆、「アーメン」と言わねばならない。」という、律法における賄賂について言及し、貴族たちを批判します。
第六の「災いだ」は、第二の「災いだ」の内容を繰り返しています。
8節からの内容は、全体的にアモス書4章1節～3節の「サマリアの女たち」と6章1節～7節の「驕れる人々への審判」の富める者への審判の預言と共通していると言われています。

大預言書のイザヤ書と小預言書のアモス書との関わり方が見えてくることにも気づきが与えられました。
最後に、今回の聖書箇所の5章7節での叫喚と流血について書かれている小預言書のミカ書を見てみたいと思います。
ミカ書2章8節「昨日までわが民であった者が敵となって立ち上がる。平和な者から彼らは衣服をはぎ取る。戦いを避け、安らかに過ぎ行こうとする者から。」
3章2節「善を憎み、悪を愛する者、人々の皮をはぎ、骨から肉をそぎ取る者らよ。」

預言書をどう読み進めていくかは、人それぞれですが、今回の聖書箇所から皆さまは様々な思いを巡らされたことと思います。
戦争・内紛・攻撃・暴力・不当な裁判・不当な判決・・・。平和とは、平安とは、安定とは、平穏とは・・・。
主イエス・キリストにある平和を祈る者でいられますように。
ルカ24章36節「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、あなたがたに平和があるように。と言われた。」

アーメン。

～分かち合い～
- 日本に住む私たちですが、平和をどのように考えますか？

１０月１５日（日）イザヤ書５章７－１０節

7イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑
主が楽しんで植えられたのはユダの人々。
主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに
見よ、流血（ミスパハ）。
正義（ツェダカ）を待っておられたのに
見よ、叫喚（ツェアカ）。
富める者の横暴
8災いだ、家に家を連ね、畑に畑を加える者
は。
お前たちは余地を残さぬまでに
この地を独り占めにしている。
9万軍の主はわたしの耳に言われた。
この多くの家、大きな美しい家は
必ず荒れ果てて住む者がなくなる。
10十ツェメドのぶどう畑に一バトの収穫
一ホメルの種に一エファの実りしかない。

貪欲に土地を広げても、大きな美しい家を持っても、自分の満足いくように美しい物で満たしても、主が共にいてくださらなければ虚しい。主が下さった土地、主が建てて下さった家でなければ虚しい。アーメンです。

１０月１６日（月）出エジプト記３章７－１２節

7主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。 8それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。 9見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。 10今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」
11モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」
12神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

神さまは私たちが貧しさや虐げや差別、無視や孤独などで苦しみや痛みを覚える時にも、その叫び(お祈り)を聞いていて下さり、そこから助け出して下さるお方であることを感謝いたします。又「私は何者でしょう」から始まるモーセの問い(4:17まで続く)の一つ一つに、丁寧にお答えなさる神さまの優しさにとても励まされます。

１０月１７日（火）マタイによる福音書２章１３－２３節

13占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」 14ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、 15ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。
16さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。

17こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。
18「ラマで声が聞こえた。
激しく嘆き悲しむ声だ。
ラケルは子供たちのことで泣き、
慰めてもらおうともしない、
子供たちがもういないから。」
19ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、 20言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」 21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。 22しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、23ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

赤児のイエスさまの命を狙うため、小さな時にも(エレミヤ書の預言成就の)悲しい出来ごと(16節)がありました。ヨセフの夢に主の天使が現れて、「エジプトに逃げるように・・」後には「イスラエルに行きなさい。」と指示がありました。夢でヘロデの子がユダヤを支配していることも告げられナザレに住みました。全てがイエスさまの重要な使命(私たちの罪からの救い)が全うされるためだったのですね。

１０月１８日（水）ハバクク書２章９－１４節

9災いだ、自分の家に災いを招くまで
不当な利益をむさぼり
災いの手から逃れるために
高い所に巣を構える者よ。
10お前は、自分の家に対して恥ずべきことを謀り
多くの民の滅びを招き、自分をも傷つけた。
11まことに石は石垣から叫び
梁は建物からそれに答えている。
12災いだ、流血によって都を築き
不正によって町を建てる者よ。
13見よ、これは万軍の主から出たことではないか。
諸国の民は力を費やしても火で焼かれるのみ。
諸民族はむなしい業のために疲れ果てる。
14水が海を覆うように
大地は主の栄光の知識で満たされる。

利己主義で貪欲なカルディア人とその支配下にあって、義を求めて苦しむ者の神さまへの叫びが書かれている様です。強国が不当な利益で災いから逃れようとしても、その反対に災いが身に起こる。流血や不正によって都を築き町を建てても、水が海を覆うように滅ぼされるとあります。現代の私たちもハバククと同じように「大地は主の栄光の知識で満たされる。」と希望を持って歩めますように・・。

１０月１９日（木）ヨハネによる福音書７章３７－３９節

37祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。 38わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」 39イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。

日常生活に疲れた時、全能の主の前に静まって御言葉を読み祈ると、聖霊で潤され、心豊かにされたことを皆さま体験されていると思います。信仰をいただいた時に、神さまに一歩近づけば神さまは10歩(何倍もの意味)近づいて下さると学びました。これだけでも素晴らしいのにそれ以上に「わたしを信じる者は、聖書に書いてある通り、その人の内から生きた水が川となって流れ出る様になる。」の素晴らしい約束に感謝いたします。

１０月２０日（金）マタイによる福音書２８章１－１０節

1さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。 2すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。 3その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。 4番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。 5天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、 6あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。 7それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」 8婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。 9すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。 10イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

イエスさまは唾をかけられ幾度となく鞭打たれ残酷にも十字架刑で葬られました。地震が起こり、主の天使は石を転がし・・。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かったとあります。詩篇57：1に罪赦され雪よりも白くされると有りますが、弟子たちの裏切を含む私たちの罪の暗黒から、イエスさまの完全な罪の赦し(漆黒→純白)が思い浮かびました。「恐れることはない」に特別な深く温かい愛を思い感謝いたします。

１０月２１日（土）エフェソの信徒への手紙２章１４－２２節

14実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、 15規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、 16十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。 17キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。 18それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。 19従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、 20使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、 21キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。 22キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

如何にもこうにも敵意という隔ての壁が大きくて仲良くなれなかったイスラエルの民と異邦人を一つにされたお方です。どうぞ私とあの方の間にも、私の国と他国の間にも、彼の国と彼の間にも、あなたがかなめ石となって下さり、真の平和と愛と赦しを置いてくださいますように、どうぞ憐れんで助けて下さい。

第３１課　「和を結ぶ」

聖書箇所：イザヤ書２７章２～６節
主題聖句：主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を地上からぬぐい
去ってくださる。これは主が語られたことである。（イザヤ２５：８）

今週の聖書教育誌の週題は「和を結ぶ」です。

旧約聖書のイザヤ書を読み始めて4週目となります。このシリーズは第38課(12月17日)の「その日を待ち望みつつ」まで続きます。クリスマスに繋がる物語として読んでいくことになっているのです

この預言者イザヤの生きた時代と共に古代イスラエルの民の有様をみてみましょう。出エジプトから約束の地カナン・現在のイスラエル(パレスチナ)に紀元前1200年くらいにイスラエルの十二部族がそれぞれの地域に定住していきました。この民は小さく・弱い民でした。前1000年くらいに初代の王・サウルを迎え王国を形成していきましたが、大国の狭間にある弱小国であり、南のエジプト、東のメソポタミアから興ったアッシリヤ、バビロニアに翻弄され続けていました。サウル王を継いだダビデ、その子ソロモンの時代は繁栄を極めた時期もありましたが、ソロモン王が十二の部族に科した税が重くのしかかり、特に税の重かった北の十部族と比較的に抑えられたダビデの出身部族である南のユダ族(ベニヤミン族)で対立もあり、ソロモン王の亡き後に北のイスラエル王国と南のユダ王国に前930年に分裂したのでした。

預言者イザヤは前8世紀(前740～前680年)ごろから南のユダ王国の王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキアの時代に活動していました。彼は宮廷官僚の職にあったと言われています。この時代、東の強大となったアッシリヤが北イスラエル王国を前722年に征服し、王国は滅亡しました。この時に多くのイスラエルの民が捕囚としてアッシリヤに送られたことから、これらの人々を「イスラエルの失われた十部族」と呼び、今日に至るまでその末裔を現在のイスラエルは探しています。この捕囚のイスラエル人に入れ代わり、アッシリヤが連れて来た他の民族とイスラエルの生き残った人たちが混血となり独自にアブラハムの信仰を繋いでいきました。この人々が「サマリア人」と呼ばれるようになります。一方の南ユダはアハズ王の時代、アッシリヤに庇護を求め従属していきました。神殿にアッシリヤの祭壇を置き異教の偶像礼拝を積極的に行ったため信仰面で大きく腐敗し、国は大きく混乱していったのでした。(前587年南ユダ王国滅亡)

このような時代、イザヤは真の神は世界の情勢がどのようであれ、全世界の主権者として、異邦人諸国もご自分の支配のもとに置いて、神がアブラハムに与えられた契約を必ず実現し、すべての民に救いを与えてくださるという信仰に立つように繰り返し励ましたのです。

長くなりましたが、改めて預言者イザヤの生きた時代を振り返ってみました。強大な力を持った勢力が現れた時に、小さく弱い者は隷属するか、滅ぼされる運命なのは何時の時代も変わらず同じだと虚しさを覚えました。しかし、神はそのような人たちを失望に終わることなく、必ず救うと約束していてくださるのです。

イザヤ書では「ぶどう畑」をイスラエルに例えて語ります。5章では神が耕したぶどう畑が良いぶどうの実とはならず酸っぱいぶどうの実となり、ぶどう畑の石垣は崩され荒れ放題となり滅びるままにされるというイスラエルの神への不従順に対する裁きが比喩として語られました。

この27章では来る日には**「見事なぶどう畑」**として不信仰を裁かれたイスラエルの回復の希望を告げます。真の信仰に立ち返ったイスラエルには敵対する者から主なる神が必ず守ってくださると言われます。**「茨とおどろ」**は呪いと裁きの象徴ですが、そのような艱難には**「わたしは進み出て、彼らを焼き尽くす。」**と、神ご自身の怒りが私たちを試みる者に向けられるのです。ですから、私たちは神の怒りを恐れる必要はないのです。なによりも大切なことは神と**「和を結ぶ」**ことです。相手に貢いだり、迎合することでの面従腹背のような人間的なものでは真の和解は人にも神に対してもありません。人間の側だけの努力だけでは決して実現できないのです。主なる神に信頼し**「わたしを砦と頼む者」**が和解に与ることが出来るのです。

このみ言葉は旧約の世界に留まらず、現代の私たちの信仰においても希望なのです。大いなる決断をして信仰生活に入ったのは良いけれど、平素の生活は少しも変わらないことに落ち込んでしまうことがあります。しかし、希望の約束を忘れず、思い起こす人には**「根を下ろせば」**、**「芽が出て」**、**「花が咲き」**、かならず**「実りで満たされる」**のです。時間がかかるかもしれませんが、神が私たちを忍耐して待ってくださいますから時がくれば花が咲き、**「救いの実」**は必ず実るのです。

預言者イザヤは強大な勢力の侵略により国が蹂躙されて宗教的にも道義的にも混乱し、分裂し、民は離散し、十部族は失われるという悲劇の渦中に神の言葉を取り次ぎました。明日がどうなるか分からない不安と恐れのなかで神との和解こそがイスラエルの回復を、すなわち主にある平和が実現すると語り続けたのです。

この回復の約束は今日の混沌とした世界に生きる私たちにも同じメッセージが届けられています。私たちはイエス・キリストの執り成しにより真の神との和解が与えられ、和解の恵みにより神の御手のなかで平安と平和が実現し、救いに与り涙は消え去るのです。

神に寄り頼む者には「主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を 地上からぬぐい去ってくださる。」のです。

～分かち合い～

- あなたが、今、イエス・キリストに執り成していただきたいと願うことがありますか。
- 私たちの教会を「ぶどう畑」と見立てたら、どんな「ぶどう園」にしたいですか。

＜言葉の解説＞
おどろ…草木、いばらなどの乱れ茂っていること。 また、その所。 あるいは、そのようなさま。 やぶ。

１０月２２日（日）イザヤ書２７章２－６節

2その日には、見事なぶどう畑について喜び歌え。
3主であるわたしはその番人。常に水を注ぎ
害する者のないよう、夜も昼もそれを見守る。
4わたしは、もはや憤っていない。
茨とおどろをもって戦いを挑む者があれば
わたしは進み出て、彼らを焼き尽くす。
5そうではなく、わたしを砦と頼む者は
わたしと和解するがよい。
和解をわたしとするがよい。
6時が来れば、ヤコブは根を下ろし
イスラエルは芽を出し、花を咲かせ
地上をその実りで満たす。

6節でぶどう畑はイスラエルとわかります。ぶどう畑は私、またはあなたでもあると思います。主は私の心に共にいて下さいます。私の番人であり、私の心に水を注いで下さいます。主は私と和解するがよいと言われます。主を信じお祈りしましょう。時が来れば、信仰の根が伸び、花を咲かせることでしょう。その花はまわりの人々を笑顔にすることでしょう。私を見守り、導いて下さる主、感謝致します。

１０月２３日（月）マルコによる福音書１０章１３－１６節

13イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。 14しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。 15はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」 16そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

子供は素直です。何しているの、なぜ、どうして、私もやりたい。本当に好奇心が旺盛です。子供は、若者は夢と希望と挑戦(チャレンジ)があります。そして前向きです。はっきり言っておく。神の国はこのような者たちのものである。私も含む高齢者の皆様。体は衰えていくでしょうけど、心は、命ある限り青春でいましょうね。

１０月２４日（火）ヨハネによる福音書４章７－３０節

7サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。 8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。 9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。 10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」 11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。 12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」 13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。

14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉
となり、永遠の命に至る水がわき出る。」 15女は言った。「主よ、渇くことがないように、
また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」
16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、 17女は答え
て、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、ま
さにそのとおりだ。 18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あ
なたは、ありのままを言ったわけだ。」 19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受
けします。 20わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所
はエルサレムにあると言っています。」 21イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさ
い。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。 22あなた
がたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いは
ユダヤ人から来るからだ。 23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を
礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられ
るからだ。 24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければ
ならない。」 25女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っ
ています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」 26
イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」
27ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚い
た。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者は
いなかった。 28女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。 29「さあ、見に
来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方
がメシアかもしれません。」 30人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」女は急いで町に行き、人々をイエスさまのもとへ導きました。人々は町を出てやって来ました。どうか。多くの人々がイエスさまの命の水をさずかりますように。そして、喜びがさずかりますように。

１０月２５日（水）ヨハネによる福音書１１章２８－４４節

28マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたを
お呼びです」と耳打ちした。 29マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに
行った。 30イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。 31家の中でマリ
アと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓
に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。 32マリアはイエスのおられる所に来て、イエス
を見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死
ななかったでしょうに」と言った。 33イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣
いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、 34言われた。「どこに葬ったのか。」彼ら
は、「主よ、来て、御覧ください」と言った。 35イエスは涙を流された。 36ユダヤ人たち
は、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。 37しかし、中に
は、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と言う者も
いた。
38イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。 39
イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主
よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。 40イエスは、「もし信じるな
ら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。

41人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。 42わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」 43こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。 44すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

イエスさまは悲しむ人々を見のがすことはできません。いきどおりを覚えて天の父に願います。「天の父よ、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。ラザロ、出て来なさい」私たちも、天の父なる神さまに、イエスさまに祈り願いましょう。きっと、その願い事かなえて下さいます。

１０月２６日（木）哀歌２章１１－１９節

11わたしの目は涙にかすみ、胸は裂ける。
わたしの民の娘が打ち砕かれたので
わたしのはらわたは溶けて地に流れる。
幼子も乳飲み子も町の広場で衰えてゆく。
12幼子は母に言う
パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。
都の広場で傷つき、衰えて
母のふところに抱かれ、息絶えてゆく。
13おとめエルサレムよ
あなたを何にたとえ、何の証しとしよう。
おとめシオンよ
あなたを何になぞらえて慰めよう。
海のように深い痛手を負ったあなたを
誰が癒せよう。
14預言者はあなたに託宣を与えたが
むなしい、偽りの言葉ばかりであった。
あなたを立ち直らせるには
一度、罪をあばくべきなのに
むなしく、迷わすことを
あなたに向かって告げるばかりであった。
15道行く人はだれもかれも
手をたたいてあなたを嘲る。
おとめエルサレムよ、あなたに向かって
口笛を吹き、頭を振ってはやしたてる
麗しさの極み、全地の喜びと
たたえられた都がこれか」と。
16敵は皆、あなたに向かって大口を開け
歯をむき、口笛を吹き、そして言う
「滅ぼし尽くしたぞ。
ああ、これこそ待ちに待った日だ。
たしかに見届けた」と。
17主は計画したことを実現し
約束したことを果たされる方。
昔、命じておかれたところのゆえに
あなたを破壊し、容赦されなかった。
敵はそのあなたを見て喜び
あなたを苦しめる者らは角を上げる。
18おとめシオンの城壁よ
主に向かって心から叫べ。
昼も夜も、川のように涙を流せ。
休むことなくその瞳から涙を流せ。
19立て、宵の初めに。
夜を徹して嘆きの声をあげるために。
主の御前に出て
水のようにあなたの心を注ぎ出せ。
両手を上げて命乞いをせよ
あなたの幼子らのために。
彼らはどの街角でも飢えに衰えてゆく。

敗れた戦場の悲惨さを嘆いています。幼子は母に言う。パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。都の広場で傷つき、衰えて、母のふところに抱かれ、息絶えてゆきます。今も世界中のどこかで、戦火の中で嘆き悲しむ人々がいます。主よ、どうか悲しむ人々は寄り添って下さい。慰め、癒して下さい。どうぞ安らぎが与えられますように。

１０月２７日（金）マタイによる福音書２３章３７－３９節

37「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者
よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。
だが、お前たちは応じようとしなかった。 38見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果て
る。 39言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と
言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」

神さまは、愛と平安を与えようと何度も手をさしのべました。しかし、反抗期の子供のように応じない。人々の心は荒れ果てています。世を愛する神さまはひとりごを地上に送ることにしました。感謝致します。

１０月２８日（土）ヨハネによる福音書１４章６－１８節

6イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、
だれも父のもとに行くことができない。 7あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父
をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」 8フィリ
ポが「主よ、わたしたちに御父をお示しください。そうすれば満足できます」と言うと、 9イ
エスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないの
か。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示しください』と言う
のか。 10わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたし
があなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、そ
の業を行っておられるのである。 11わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、
わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。
12はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業
を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。 13わたしの名によって願うこと
は、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。 14わたしの
名によってわたしに何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」
15「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。 16わたしは父にお願い
しよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。
17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れる
ことができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共にお
り、これからも、あなたがたの内にいるからである。 18わたしは、あなたがたをみなしごに
はしておかない。あなたがたのところに戻って来る。

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる事を信じなさい。わたしを信じる者は、わたしが行う業よりも、もっと大きな業を行うようになる。わたしの名によって、わたしに何かを願うならばわたしがかなえてあけよう」イエスさまは本当に私たちを愛してくださっています。その愛に私たちは喜びあふれます。イエスさま、感謝致します。

第３１課　「呼びかけよ」

聖書箇所：イザヤ書４０章１～８節
主題聖句：草は枯れ、花はしぼむがわたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。
（イザヤ４０：８）

このイザヤ書40章から「第二イザヤ」と呼ばれる箇所になります。
バビロン捕囚からエルサレムへの帰還、神殿を再建するまでの時代に神さまが語りかけている御言葉が続いています。それは、慰めと励まし、希望を与える御言葉です。

　この「第二イザヤ」の初めの言葉が「慰めよ」です。バビロンという知らない土地へ50年間強制的に移住させられ、その土地で苦役と生活をさせられていた民への言葉です。
神さまは更に、「苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。」と言われました。
　エルサレムの民を「彼女」と表現している所は面白いですね。37章22節で「おとめである娘シオンは～」「娘エルサレムは～」と表現されているのでその流れであると思われます。「罪のすべてに倍する報いを主の手から受けた」、あれ？なぜ倍に？と初めて読んだ時に目が留まりました。多分、当のエルサレムの民もなぜ？そんなに失望させてしまったから？となっていたかもしれません。神さまのご判断なので、それが最善であると言えるのですが。ともあれ、今の私たちはイエスさまが全ての罪を償って下さっているおかげで、こういった「罪による報い」からは解放されているのは感謝ですね。なので、今の「イエスさまの血の贖いによる罪赦されし世界」は神さまの報いを受けて許された状況と似ていると言うことも出来ます。イエスさまはこれから起こしてしまう罪も含めて贖って下さっているのでより良い状況といえますが。それでも、信仰生活を送る上での指針とすることは出来るではないでしょうか。

　そして表題の「呼びかけよ」と言われます。
「肉なる者は皆、草に等しい。」から始まる6・７・８節前半は仏教の「無常」のような印象を受けます。「無常」とは「この世に永遠不変のものは無い」ということ。また「主の風」という言葉が出てきます。ホセア書 13章15節にも記されています。「エフライムは兄弟の中で最も栄えた。 しかし熱風が襲う。 主の風が荒れ野から吹きつける。 水の源は涸れ、泉は干上がり すべての富、すべての宝は奪い去られる。」とあるように、この地方の荒れ野に吹く熱風は1日にして草花を枯れさせるそうです。それを「主の（裁きの）風」と呼んでいたようです。

「呼びかけよ」とは、「草は枯れ、花はしぼむ」と人の世のはかなさを伝えたい訳ではなく、その後に続く、「わたしたちの神の言葉はとこしえにたつ」、この揺るぎない希望を「呼びかけよ」と言っています。この世も死すらも超越している、信じるに足るお方からの、決して失望に終わることのない希望を皆に「呼びかけよ」と言われました。

イザヤ亡き後も様々な預言者が神さまの言葉を民に伝え続け、バビロン捕囚という苦難の５０年間、エルサレム帰還、神殿建設という神さまの預言の成就のため、神さまが励ましと希望の言葉を与え続け、民が実行していくという共同作業の様な感じが、大変ではあったでしょうけど、神さまを身近に感じられていたのではないでしょうか。

東日本大震災後、教会員が住む所も無い状況から、僅か2年で新会堂を建てあげた福島第一聖書バプテスト教会の歩みがバビロン捕囚後の歩みと似ているように思えます。佐藤彰先生が講演で「住む所が与えられることから始まり、その時その時に必要な知恵や助け手が与えられ、大変であったけれど、主が身近に感じられ、恵みを実感できた濃厚な歩みの時でした。」と言われていました。
常盤台教会はそんな大変な状況ではないですけれど、これからも歩み続けるための様々な課題を神さまと共にひとつひとつ乗り越え、主を身近に感じ、豊かな恵みを感じつつ歩んでいきたいですね。

～分かち合い～
- あなたが、今、イエス・キリストに執り成していただきたいと願うことがありますか。
- 私たちの教会を「ぶどう畑」と見立てたら、どんな「ぶどう園」にしたいですか。

１０月２９日（日）イザヤ書４０章１－８節

1慰めよ、わたしの民を慰めよと
あなたたちの神は言われる。
2エルサレムの心に語りかけ
彼女に呼びかけよ
苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、
と。
罪のすべてに倍する報いを
主の御手から受けた、と。
3呼びかける声がある。
主のために、荒れ野に道を備え
わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を
通せ。
4谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低く
せよ。
険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。
5主の栄光がこうして現れるのを
肉なる者は共に見る。
主の口がこう宣言される。
6呼びかけよ、と声は言う。
わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、
と。
肉なる者は皆、草に等しい。
永らえても、すべては野の花のようなもの。
7草は枯れ、花はしぼむ。
主の風が吹きつけたのだ。
この民は草に等しい。
8草は枯れ、花はしぼむが
わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

預言者エレミアは、安易な偽りの平和を語った偽預言者たちを糾弾しました。
現代社会でも様々な宗教があり、それによる不幸な被害者がいます。
イエスさまに出会う前の人々は何が正しい宗教かを判断する事は非常に難しいのです。
キリスト教聖書の教えが正しい事をどう伝えたら良いのか。

１０月３０日（月）マタイによる福音書１３章３３節

また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

水で捏ねたパン粉にパン種(イースト菌)を入れるとパンが膨らむ様に、日本の
人口の1%以下のクリスチャンが、どうやってパン種を入れるパン(ノン・クリスチャン)
を探し、見つけるかですね。

１０月３１日（火）ヨハネによる福音書２１章７－１９節

7イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。 8ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。 9さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。 10イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。 11シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。 12イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。 13イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。 14イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。
15食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわた

しを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。16二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。 17三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。 18はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」 19ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」三度言われた。
(ヨハネの福音書21章15～17節)
「あなたは今日、鶏の鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう」と。
イエスさまは人の弱さを御存知です。

１１月１日（水）ヘブライ人への手紙１１章１－３節

1信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。 2昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。
3信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。

日本人は、山、川、海、森などの目に見えるものを拝みました。日本人と日本語は
目に見えないものを考える事が苦手です。キリスト教の聖書では、目に見えない
創造主・神の言葉を伝えているので、理解し実感するのに時間が掛かります。

１１月２日（木）創世記１章１－３節

1初めに、神は天地を創造された。 2地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。 3神は言われた。
「光あれ。」
こうして、光があった。

神によって創造された「光」は、地球上の全生命にとって命の根源です。
地球が自転する事で昼夜があり、公転する事で四季があります。神の言われた
「光あれ」が太陽中心の我々の日常生活の基本です。

１１月３日（木）列王記下２２章８節－２３章３節

8そのとき大祭司ヒルキヤは書記官シャファンに、「わたしは主の神殿で律法の書を見つけました」と言った。ヒルキヤがその書をシャファンに渡したので、彼はそれを読んだ。 9書記官シャファンは王のもとに来て、王に報告した。「僕どもは神殿にあった献金を取り出して、主の神殿の責任を負っている工事担当者の手に渡しました。」 10更に書記官シャファンは王に、「祭司ヒルキヤがわたしに一つの書を渡しました」と告げ、王の前でその書を読み上げた。 11王はその律法の書の言葉を聞くと、衣を裂いた。 12王は祭司ヒルキヤ、シャファンの

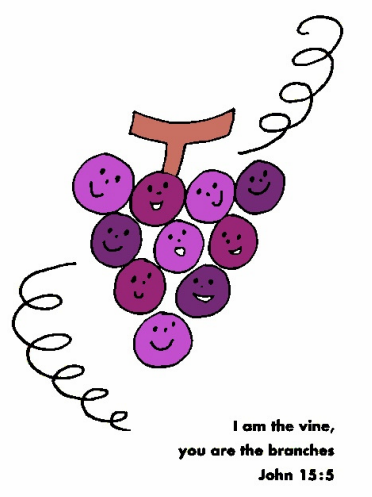
子アヒカム、ミカヤの子アクボル、書記官シャファン、王の家臣アサヤにこう命じた。 13
「この見つかった書の言葉について、わたしのため、民のため、ユダ全体のために、主の御旨を尋ねに行け。我々の先祖がこの書の言葉に耳を傾けず、我々についてそこに記されたとおりにすべての事を行わなかったために、我々に向かって燃え上がった主の怒りは激しいからだ。」
14祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シャファン、アサヤは女預言者フルダのもとに行った。彼女はハルハスの孫でティクワの子である衣装係シャルムの妻で、エルサレムのミシュネ地区に住んでいた。彼らが彼女に話し聞かせると、 15彼女は答えた。「イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたたちをわたしのもとに遣わした者に言いなさい。 16主はこう言われる。見よ、わたしはユダの王が読んだこの書のすべての言葉のとおりに、この所とその住民に災いをくだす。 17彼らがわたしを捨て、他の神々に香をたき、自分たちの手で造ったすべてのものによってわたしを怒らせたために、わたしの怒りはこの所に向かって燃え上がり、消えることはない。 18主の心を尋ねるためにあなたたちを遣わしたユダの王にこう言いなさい。あなたが聞いた言葉について、イスラエルの神、主はこう言われる。 19わたしがこの所とその住民につき、それが荒れ果て呪われたものとなると言ったのを聞いて、あなたは心を痛め、主の前にへりくだり、衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしはあなたの願いを聞き入れた、と主は言われる。 20それゆえ、見よ、わたしはあなたを先祖の数に加える。あなたは安らかに息を引き取って墓に葬られるであろう。わたしがこの所にくだす災いのどれも、その目で見ることがない。』」彼らはこれを王に報告した。
1そこで王は人を遣わして、ユダとエルサレムのすべての長老を自分のもとに集めた。 2王は、ユダのすべての人々、エルサレムのすべての住民、祭司と預言者、下の者から上の者まで、すべての民と共に主の神殿に上り、主の神殿で見つかった契約の書のすべての言葉を彼らに読み聞かせた。 3それから王は柱の傍らに立って、主の御前で契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、魂を尽くして主の戒めと定めと掟を守り、この書に記されているこの契約の言葉を実行することを誓った。民も皆、この契約に加わった。

ユダ王国第16代ヨシア王は主の目に適う、31年間の治世を行った。次の17代以降王国は乱れ、エジプトやバビロンへ捕囚となった。17代以降の王が主の目に適った治世を行ったなら、侵略されなかったのでしょうか。今の世界情勢では、独裁国家が、自由/平等/民主主義の国を侵略し、独裁政権が国民を蹂躙しています。

１１月４日（金）出エジプト記３章１１－１４節

11モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」
12神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」
13モーセは神に尋ねた。
「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」
14神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

宇宙や地球上の生命が神の時間に従って、脈々と受け継がれている事を考えると、
その創造主・神が今も「私はいる、という者」として存在している事を感じます。



2023.10　成人科